

教育講演 2

「薬液の血管外漏出性皮膚傷害の基礎研究」

第 48 回日本創傷治癒学会

2018 年 11 月 29 日(木) 14:50~15:40

会場：第 1 会場（ホール）

司会：溝上 祐子（公益社団法人日本看護協会看護研修学校 認定看護師教育課程 課程長）

講師：武田 利明（岩手県立大学 看護学部 学部長）

概要：

薬液の静脈内投与に伴う皮膚傷害は、血管外漏出性皮膚傷害(いわゆる点滴漏れ)として知られているものの、その病態に関する基礎研究は少なく、看護ケアや治療についても十分に検討されてこなかった。臨床の場では輸液剤も含め静脈内投与の薬剤は多く使用されており、漏れた場合の看護ケアとして温罨法を実施している看護職は少なくない。その目的は「漏れた薬液の吸収」と考えられているが、それを裏づける研究データは報告されていない。また、リバノール湿布を選択している看護職は、その目的について明確に説明できなかった。さらに、カテコールアミン系薬剤が漏れた場合は、温罨法により収縮した血管を拡張し循環を良くすることで漏れた薬液を吸収すると考えられている。このように薬液が漏れた場合は、確かな根拠もなく「思い込み」による看護ケアが行われている。

血管外漏出性皮膚傷害の特徴として、抗がん剤とそれ以外の一般の薬剤では、組織傷害の発生過程が異なることを示唆するデータが得られている。抗がん剤では、薬液による化学的な刺激と抗がん剤が有する細胞毒性に起因する病変であり、組織傷害は急性炎症後も断続的に継続する。これに対し、輸液剤も含めた一般の薬剤が漏れた場合は、化学的な刺激(異物)に対する急性炎症反応のみであり、その作用は一時的である。急性炎症に対する冷罨法の有効性については、基礎研究と臨床研究により明らかになっている。しかし、看護ケアとして温罨法を実施している看護職がいまだに少なくないのが現状である。

看護師が実施する 38 特定行為(診療の補助)の一つである、抗がん剤などが漏れた場合の処置では「病巣周囲へのステロイド薬の局所注射」が推奨されている。これは、患者にとって強烈な痛みを伴う処置であり、その効果を疑問視している医療職も多い。また、有効性を裏づける研究データが少なく、ステロイド軟膏の塗布でも効果があったとの臨床研究も報告されている。そこで演者らは ステロイド薬の有効性について in vivo と in vitro の両面からの基礎研究にも取り組んでいる。

本講演では、日ごろ経験している薬液の血管外漏出性皮膚傷害について、薬剤性静脈炎の病態も含め基礎研究で得られた知見を紹介する。